

第5学年 社会科 学習指導案

山形市立大曾根小学校 教諭 佐藤 亨樹

1 単元名 未来の食を守るには？ ―備蓄米から考える食料生産―

2 単元の目標

(1) 食料自給率や輸入などの外国との関わりなどについて調べ、持続可能な食料生産・食料確保が重要な課題であることや食料自給率をあげることが大切であることを理解できる。 (知識・技能)

(2) 食料自給率と食生活の変化を関連付けたり、食料生産について学習してきたことを総合したりして食料生産の課題について考え、学習してきたことをもとに、消費者や生産者の立場などから多角的に考えて、これからの農業の発展について考え、表現できる。 (思考力・判断力・表現力)

(3) これからの食料生産について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして問題解決しようとする態度や、学習したことをもとに農業の発展に向け、自分ができることを考えようとする態度を養う。 (学びに向かう力、人間性等)

3 単元について

(1) 教材観

本単元は、学習指導要領解説5年の内容(2)「我が国の農業や水産業における食料生産」にあたる。

本単元で扱う教材の1つ目は「政府備蓄米」である。「政府備蓄米」は不作や大規模災害に備え、政府が国民への安定的な食糧供給を目的として保管している米で、1993年の平成米騒動を教訓に1995年に制度化されている。令和6年に発生した「令和の米騒動」では、米価格抑制のために、「政府備蓄米」を放出、一時的に卸売価格が下落する運びとなった。本単元では「政府備蓄米」の意義について考えていくことを通して、我が国の食料生産の本質的な問題について捉えられるようにしていく。「政府備蓄米」の目的として、「不作や大規模災害時の備え」、「米価格の安定」に加えて「輸入が止まったときの対応」とある。食料自給率がカロリーベースで40%弱の我が国では、大豆や小麦など多くの食料を輸入に頼っている。もし、輸入元の国で問題が発生した場合、輸入できたはずの食料は輸入できず、食料不足に陥る危機も想定される。そこで、食料の安定供給のためには国内自給率98%を誇る米の生産を十分に成り立たせていく必要があると考える。しかし、国民の食生活の変化や、農業を取り巻く諸課題も相まって、米の生産量はさらに減少しているのが現状である。このような問題を解決するために「政府備蓄米」は一過性の解決方法にしかかなりえず、本質的な問題の解決にはつながらない。食料問題にはどのような課題があり、その解決のために自分たちにできることは何なのかを考えられる学びとしていきたい。

2つ目は「農業・農地の多面的機能」である。日本の農業は、食料を生産するだけでなく、洪水や土砂崩れを防ぐ国土保全、地下水位を安定させる水源涵養、生態系を守る自然環境保全、気温上昇を緩和する気候緩和など、私たちの暮らしを支える多様な役割を担っている。また、美しい農村景観の形成や、稲作を起源とする伝統文化や祭りを次世代へ継承する文化伝承の役割も果たしている。本校が位置する大曾根地区は、総面積の約半分を農地が占めており、農地は子どもたちにとって身近で当たり前の存在である。しかし、その農地から自分たちが受けている恩恵について、十分に意識している児童は多くない。そ

ここで本単元では、身近な地域の農地を教材として取り上げ、農業が自分たちの生活や地域の安全、環境と深く関わっていることに気付かせたい。さらに、日本の農業が衰退することが、食料だけでなく、暮らし全体に影響を及ぼす可能性があることを捉え、これからの農業を支えるために自分たちにできることを考える学習へとつなげていく。

(2) 児童観

「政府備蓄米」は、ニュース等で連日大きく取り上げられたことから、本学級の子どもにとっても認知度は高い話題であると考えられる。しかし、その役割や意義については、言葉として知っている段階にとどまり、十分な理解には至っていない児童が多いと予想される。そこで本単元では、多様な資料を根拠として意見を出し合い、議論する学習を通して、政府備蓄米の意義について自分なりの考えを構築できるようにしたい。また、その学びを手がかりに、食料生産が抱える本質的な課題へと視野を広げ、追究を深めていくことをねらいとする。

一方で、本学級の子どもは、公の場で自分の考えや思いを表明したり、地域や社会とつながって活動したりする経験が十分とは言えない現状がある。そこで、農業を支えるために自分たちにできることを考え、実際に行動化する学習を位置付けることで、他者と関わりながら考えを伝える力や、自分の考えに責任をもって主体的に活動し、最後までやり切る力を育てていきたい。

(3) 指導観

本単元で大切にしていきたい手立ては大きく2点である。

1点目は、児童の問題意識を高めるための導入の工夫である。単元の導入段階において、政府備蓄米と山形県のブランド米「つや姫」を食べ比べる体験活動を設定した。「政府備蓄米」は、ニュース等を通して児童の認知度は高いものの、実際に食べた経験のある児童は少なく、日常の食生活とは距離のある存在となっている。そこで、実際に試食する活動を取り入れることで、古米特有の風味や食感を身近なブランド米と比較しながら捉えさせたい。その上で、「なぜ、このような古いお米を国が保管しているのか」という問いを投げかけることで、政府備蓄米の存在意義に対する疑問や課題意識を喚起し、主体的な学習へとつなげていくことをねらいとする。

2点目は、ゲストティーチャー（以下 GT）との交流を通じた学びの深化である。本単元では、令和の百姓一揆代表であり、本県長井市で農業を営む菅野芳秀氏を GT として招く。菅野氏は農業に従事する一方で、「令和の百姓一揆」を主宰し、農業を取り巻く深刻な課題を社会に訴えるため、全国の農家と連携してトラクターによるデモ行進を行うなど、精力的に活動している人物である。農業の衰退を“国民のいのちに関わる問題”と捉え、行動を起こし続ける菅野氏の生き方は、子どもたちにとって価値観や行動の変革を促す生きた教材になると考える。本単元では、菅野氏へのインタビュー活動を通して、その思いや営みを受け止められるようにするとともに、農業がもつ多面的機能を踏まえた農業の意義について理解を深めていく。そして、農業を支えるために自分たちにできることを考え、学びを行動へとつなげていくこととする態度を養っていきたい。

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

相互性：身近にある農業は、食料を生産するだけでなく、国土の保全や環境の維持、文化の継承など、多面的な機能をもち、私たちの生活に大きな恩恵をもたらしていること。また、農業と自分たちのくらしは相互に支え合う関係にあること。

公平性：消費者としての立場だけで農業を捉えるのではなく、生産者の立場にも目を向け、農業が持続可能な産業として成り立つために何が必要かを考えていくこと。そのことが、結果として自分たちのくらしを守ることにもつながること。

責任性：農業や食料生産の課題を生産者任せにするのではなく、消費者である自分たちにも役割と責任があることを理解し、生産者を支えるために、自分たちにできる行動を考え、実践していくこと。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

批判的に考える力：政府備蓄米の意義について問いをもち、各種資料を根拠に考え直す力

コミュニケーションを行う力：生産者を支えるために消費者ができることを考え、他者に伝える力

進んで参加する態度：生産者を支えるために自分ができることを考え、責任をもって主体的に実践し、やり切ろうとする態度

・本学習で変容を促す ESD の価値観

世代内の公正：消費者という立場だけで農業を捉えるのではなく、同じ時代を生きる生産者の立場に目を向け、農業が成り立つために何が必要かを考えていくことが大切である。互いに支え合うことが、自分たちのくらしを守ることにつながっている。



・達成が期待される SDG s



- 1 1 住み続けられるまちづくりを
- 1 2 つくる責任つかう責任

4 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<p>①食料自給率や輸入などの外国との関わりなどについて各種資料などで調べ、持続可能な食料生産・食料確保が重要な課題であること、食料自給率をあげることが大切であることを理解している。</p>	<p>①食料自給率と食生活の変化を関連付けたり、食料生産について学習してきたことを総合したりして食料生産の課題について考え、表現している。</p> <p>②学習してきたことをもとに、消費者や生産者の立場などから多角的に考えて、これからの農業の発展について考え、表現している。</p>	<p>①これからの食料生産について、予想や学習計画を立てたり学習を振り返ったりして問題解決しようとしている。</p> <p>②学習したことをもとに農業の発展に向け、自分ができることを考えようとしている。</p>

5 単元の指導計画（全9時間）

次	○主な学習活動 ・ 予想される児童の発言	学習への支援 (・)	評価 (△) 備考 (・)
1	<p>問い 備蓄米ってどんなお米なのかな？</p> <p>○備蓄米を試食して、備蓄米の意義について疑問をもち、学習問題を設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔の米を、売ったり食べたりしないで保管していると聞いたことがある。 ・昔の米だから美味しくないな。においもくさい。 ・米が高くて保管していたものを売ろうになったとニュースで見た。 ・少し前にスーパーで売っているのを見た。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2つの米の違いについて、見た目、味、においなどの視点を共有して観察できるようにする。 	△ウ①
<p>学習問題①：日本では米をたくさんつくっているのに、本当に備蓄米は必要なのかな。</p>			
2 3 4	<p>○自分の予想をもとに、学習計画を立てて調べ学習を行う。 〈想定される予想〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米がなくなった時のためにとっているのかな。 ・災害や病気・虫が流行って米がとれなくなった時のために保管しておくのかな。 ・最近では異常気象も多いし、米がとれなくなっているのかな。 ・米が高くなって買えない人のためにとっておくんじゃない？ ・大曽根地区でも米をつくっていない田んぼがあった。田んぼが減ると米の生産量も少なくなりそう。米が足りないのかな。 ・農家を辞める人が多いときいたけど、関係あるかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別での調べ学習となるため、子どもの追究している内容を見取り、適宜助言したり、内容が同じ児童同士をつなげたりして、対話的な学びをつくる。 	△ウ①
5	<p>○学習問題①について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害が起きたときに米が足りなくなる被災地へ届けるために備蓄しているんだ。 ・米が少ないとみんなが米を買おうとするから値段が高くなる。消費者にとっては大変。備蓄米をお店で売る米を増やすと値段が上がるのを防げる。でも生産者の人にとっては高く売れた方がいいのかな。 ・小麦粉など日本の食料は外国から輸入しているから、もし外国から輸入できなくなるとパンや麺が食べられなくなる。するとみんな米が必要になってくるから米をとっておいた方がいい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 根拠となる資料や、意見する立場が明確になる構造的な板書を心掛ける。 	△イ①

	<p>なと思った。</p> <p>発問：日本に備蓄米って必要？</p> <p>発問：備蓄米があれば、これからも自分たちの食料は安心？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あった方がいい。だけど備蓄米だけでは十分ではないと思う。備蓄米の備蓄量は日本国民全員の1か月分の食料にしかない。もっと対策があった方がよさそう。 ・買いだめとかする人がいて、必要な分が行き渡らない人もいると思う。 ・もっと米をたくさんたくさんつくったらいいんじゃない？ <p>発問：どうしてもっと米をつくらないんだと思う？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農家を辞める人が多いからかな。高齢化しているみたい。 ・農家の人数が減ってきているという資料を見つけた。 ・大曾根でも田んぼで大豆やそばを育てているところがあったね。田んぼはあるのに米をつくっていない。「転作」と資料にあった。資料にもみんなラーメンとか食べるから、昔より米を食べなくなったとあったよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「必要である」に偏る議論が予想されるため、補助資料を用意して思考をゆさぶることで、食料生産の本質的な問題に気付けるよう促す。 	
6	<p>○令和の百姓一揆代表 菅野芳秀さんにインタビューする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業の役割って食べ物をつくることだけでなく、災害を防いだり、生き物の住処をつくりだしたり、いろいろな働きをもっていることがわかったよ。 ・農業を守ることで自分たちの生活を守ることにつながっているんだね。 	<ul style="list-style-type: none"> ・GT の話を聞くだけにならないよう、適宜子どもからも意見を話せるような声掛けをする。 	△ア①
7	<p>○菅野さんの話から、学習課題を設定する。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">学習問題②：自分たちの食を守るために、私たちがしなければいけないことって何かな。</p> <p>○自分たちができることを調べる。</p>		
8 く 9	<p>○自分たちの食を守るために、自分たちができることを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっと日本でつくったものを食べるといいのかな。でも国産のものは値段が高いと言っていた。 ・自分たちも総合で野菜を育てているけど、自給率を高めるために役立っているんだね。 ・山形県の食糧自給率が140%もあるんだね。それを支えている農家の人たちが働きやすいように考えていかないといけない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調べたことが本当に実現可能なのか吟味する活動を設定し、言いっぱなしにせず、行動化につなげていけるようにする。 	△イ② ウ②

6 児童の変容

本実践を通して、児童の農業に対する価値観には顕著な変化が見られた。学習前の子どもたちは、米を「当たり前に入りにするもの」「日本では十分に生産されているもの」と捉え、農業や農地の現状について深く考える機会をもっていなかった。しかし、学習を重ねる中で、農業が抱える課題や生産者の思いに触れ、農業と自分たちの生活が相互に支え合う関係にあるという相互性の視点が育まれていった点に、本単元の成果が表れている。

T.Mさんは学習前について「米がたくさん食べられるから、農家さんもたくさんいて米も十分あると思っていました」と振り返っている。これは、消費者としての立場のみで農業を捉えていた状態を示している。一方、学習後には「農家さんは想像していたより少なくなっていて、米もだんだん減っていることがわかり」と述べ、担い手不足や生産量減少という現実を目に向け、生産者の立場にも思いを寄せる公平性の視点が見られた。さらに「地産地消で農家さんを応援したり、お米を一粒でも大切にしたりしたい」と語り、生産者を支えるために自分にできる行動を考える責任性の表れが確認できる。

S.Rさんは、学習前は荒廃農地を見ても「何も思わなかった」と述べているが、学習後には「農業問題や私たちの生活につながっていることがわかった」と認識を改めている。これは、農地の問題を自分たちの暮らしと結び付けて捉える相互性の視点の表出である。また、「農家さん同士が協力して農地を利用していることを知り、私にも何かできないかと思った」と振り返り、地域で農地を守る営みに気付き、自身の役割を考え始める責任性の芽生えが見られた。

I.Kさんは、「前はお米を食べて『おいしい』としか思わなかった」が、「大変な状況の中で農家さんが作っていることが思い浮かぶようになった」と変化を語っている。さらに、農家を営む家族の働きと重ねながら「生活を支えるお金の重み」にも気付いており、生産者の努力や立場を踏まえて農業を捉える公平性と、農業が自分たちの生活を支えているという相互性の理解が深まっている様子がうかがえる。

Y.Iさんは、「食料の心配はいらないと思っていた」という認識から、「農家さんの働く環境が悪くなり、将来食料を確保できなくなる心配がある」と危機意識をもつようになった。また、「多くの消費者がこの現状を知らない」と他者の認識にも目に向け、「多くの人に伝えていくことが必要」と語り、課題解決を社会全体の責任として捉える責任性の視点が表れている。

以上の振り返りから、児童の価値観は、農業を「当たり前にあるもの」と捉える段階から、農業と生活のつながりを意識する相互性、生産者の立場に立って考える公平性、さらに消費者である自分たちにも役割と責任があると捉え行動につなげようとする責任性へと深化したことが明らかになった。加えて、農業や食料をめぐる課題を一部の人の問題としてではなく、同じ世代のすべての人が共有すべき社会的課題として捉え、理解の輪を広げようとする姿が見られた点は、世代内の公正に関わる価値観が育まれつつあることを示している。本実践は、農業を自分たちの生活と結び付け、将来にわたって守り支えるべき産業として捉えられるようになった点で、一定の成果を上げたと考えられる。

7 考察

〈変容をもたらした要因〉

本実践において子どもに価値観の変容をもたらした要因として、農業の課題解決に向けて最前線で活動している人物と出会わせたことが挙げられる。

ゲストティーチャーとして招いた菅野氏は、50年以上にわたり農業に携わってきた現役農家であると同時に、「令和の百姓一揆」代表として、生産者が直面する厳しい現状を社会に訴え続けている人物である。子どもたちは、生産者本人の生の声を直接聞くことで、農業の課題について実感を伴って理解することができたと考えられる。菅野氏が語る言葉には、長年農業に向き合ってきたからこそその重みがあり、その姿勢や生き方そのものが強い印象を与え、子どもたちの憧れの対象となったことが推察される。また、菅野氏が「みんなも何かできることはないか考えてほしい」と投げかけた言葉は、学習を自分事として捉える意識を高める重要な契機となった。この呼びかけにより、農業の現状を知るだけの学習から、課題解決に向けて参加しようとする主体的な学習へと意識を転換させていった。実際に、「自分たちが学んだことを多くの人に知らせたい」という思いをもつ子どもも現れ、学びを行動へとつなげようとする意欲の高まりが確認された。

以上のことから、課題の当事者として生きる人物との出会いは、子どもの認識を深めるだけでなく、価値観の変容や行動化へのエネルギーを生み出す上で、大きな役割を果たしたと考えられる。

〈本実践の課題〉

本単元の課題として、1つ目に、ねらいとしていた「農業の多面的機能」についての理解が十分に深まらなかった点が挙げられる。その要因として、ゲストティーチャーの話が主に食料問題に終始し、農業がもつ国土保全や文化継承などの側面にまで十分に触れられなかったことが考えられる。今後は、事前に入念な打ち合わせを行い、児童に伝えたい内容や視点を共有した上で授業を構成する必要がある。

2つ目に、安定した食料確保についての考察が、高齢化、人手不足、就労環境の悪さなど、生産者側の課題に偏ってしまった点である。農業を取り巻く問題の背景には、国民の食生活の変化や、それに伴う食料自給率の低下といった消費者側の要因も存在するが、こうした視点が十分に扱われなかった。消費者として「今の自分たちに原因はないのか」「この問題を解決するために自分の行動を本当に変えられるのか」などの考察が弱かったため、学習問題②を検討する際には、実感の伴わない議論に終始していた様子が見られた。行動化に向けた学習を進めるためには、消費者の選択が農業や食料供給に与える影響を改めて捉え直す必要がある。自分たちの生活に目を向け、農業の課題との因果関係を捉える学習展開の工夫が必要であったと考える。

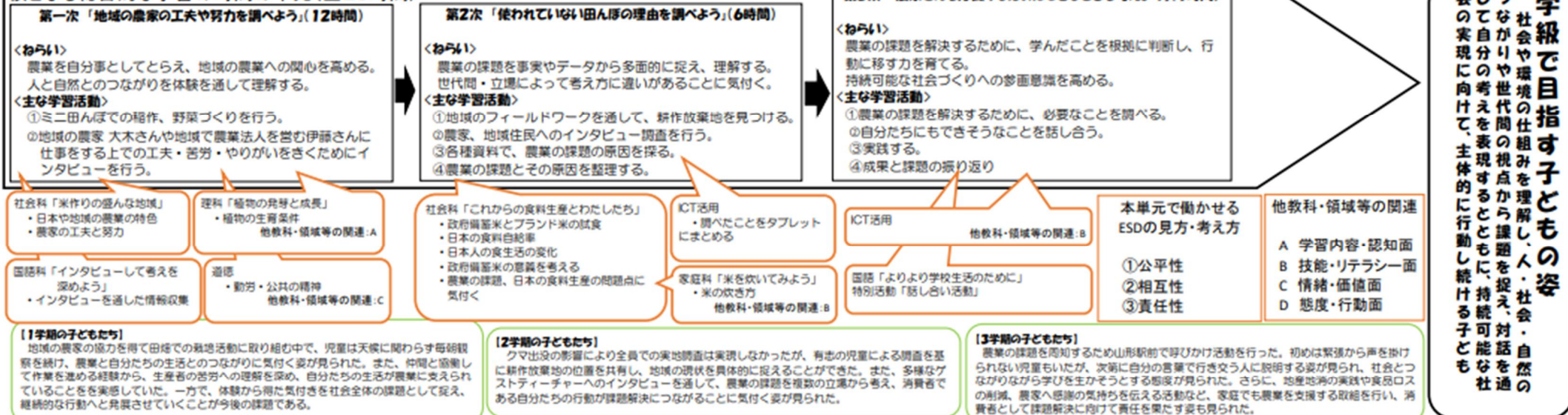
令和7年度 第5学年 学級経営案・学級ESDカリキュラム

担任氏名 佐藤 亨 樹

学校教育目標 大目標に誇りを持ち、未来を拓く子供の育成

【目指す子ども像】	主体的に考え、学び合う子ども 心が通い合う子ども 仲間と鍛え合う子ども	(知) (徳) (体)	【学年教育目標】	○自ら考え、学び合う子ども ○相手を思いやり、行動する子ども ○仲間と鍛え合う子ども	(知) (徳) (体)
【学習する児童が身に付ける力】	○身に付けた知識や技能を学習や生活に活用することができる。(知識及び技能) ○経路や理由を明確にして、自分の考えを表現することができる。(思考力、判断力、表現力等) ○自ら学習を促発しながら、粘り強く取り組もうとする。(学びに向かう力、人間性等)	(知識及び技能) (思考力、判断力、表現力等) (学びに向かう力、人間性等)	【学年としてESDで育成を目指す児童・能力】	○社会や環境に関する課題を複眼的に捉え、異なる立場の状況を把握し、自分とのつながりを見出して、持続可能性の視点から責任ある判断ができる。 ○社会や環境に関する課題について、得られた情報を批判的に吟味したり、多様な立場や価値観を踏まえ考えたりするとともに、対話を通して自分の考えを表現できる。 ○社会や環境に関する課題を自分事としてとらえ、よりよい社会の実現に向けて、多様な人と協働しながら、主体的かつ継続的に学びや行動に参画しようとする。	(知識及び技能) (思考力、判断力、表現力等) (学びに向かう力、人間性等)
【学年目標】	周り見て 本気で取り組む ひまわりナイン ～いつでも仲良く 計画的に～		【指導の重点】	○多様な立場の意見や事実に触れさせ、対話と振り返りを通して、自己とのつながりを考え根拠ある判断を促す指導を心掛ける。 ○1つの正解に固執せず、根拠を基に問い返し合う対話を行うことで、多様な考えを尊重する学級風土をつくる。 ○身近な課題と学習を結びつけ、協働活動を通して、学びや行動に意欲を持って関わろうとする経験できるようにする。	

核となる総合的な学習の時間の単元(全25時間)



学級で目指す子どもの姿

社会や環境の仕組みを理解し、人・社会・自然のつながりや世代間の視点から課題を捉え、対話を通して自分の考えを表現するとともに、持続可能な社会の実現に向けて、主体的に行動し続ける子ども

職分	前期の反省	後期の反省
【学習指導】	各教科の用語の意味を授業の中で確認できるようにするために、用語の意味を全員共有したり、その用語を活用して説明する機会を毎時毎時設定したりして、表現力を高められるようにする。	各教科の用語の意味を授業の中で確認できるようにするために、用語の意味を全員共有したり、その用語を活用して説明する機会を毎時毎時設定したりして、表現力を高められるようにする。
【学習指導】	根拠や理由を挙げながら自分の考えを表現する力を育成するために、根拠や理由を明確にして、自分の意見を話し、善い行いを勧める活動を、どの授業でも設定する。その際、根拠と理由の違いについても意識して授業を進めようとしている。	根拠や理由を挙げながら自分の考えを表現する力を育成するために、根拠や理由を明確にして、自分の意見を話し、善い行いを勧める活動を、どの授業でも設定する。その際、根拠と理由の違いについても意識して授業を進めようとしている。
【学習指導】	朝のスピーチの時間を中心として、人、もの、ことに対する関心を高めるとともに、自分と向き合いさらに高めようとする力をつける。話し合いを通して子ども同士で話し合う力を高めたり、自己の理解を深めたりできるようにする。	朝のスピーチの時間を中心として、人、もの、ことに対する関心を高めるとともに、自分と向き合いさらに高めようとする力をつける。話し合いを通して子ども同士で話し合う力を高めたり、自己の理解を深めたりできるようにする。
【学習指導】	子ども一人ひとりが自己存在感を高め、自信をもって生活していくために、こまめに声かけをして良い行動を褒めつけたり、学期末の学芸や各教科の授業の際に、子ども同士でお互いの行動を評価する場面を設け、認め合える雰囲気づくりをしたりしていく。	子ども一人ひとりが自己存在感を高め、自信をもって生活していくために、こまめに声かけをして良い行動を褒めつけたり、学期末の学芸や各教科の授業の際に、子ども同士でお互いの行動を評価する場面を設け、認め合える雰囲気づくりをしたりしていく。
【学習指導】	子ども一人ひとりが自己存在感を高め、自信をもって生活していくために、こまめに声かけをして良い行動を褒めつけたり、学期末の学芸や各教科の授業の際に、子ども同士でお互いの行動を評価する場面を設け、認め合える雰囲気づくりをしたりしていく。	子ども一人ひとりが自己存在感を高め、自信をもって生活していくために、こまめに声かけをして良い行動を褒めつけたり、学期末の学芸や各教科の授業の際に、子ども同士でお互いの行動を評価する場面を設け、認め合える雰囲気づくりをしたりしていく。
【学習指導】	話し合いの仕方や合意形成を図って意思決定を行う力をつけるために、学芸や国語の話し・聞く学習の時間を活用し、児童全員が話し合いでそれぞれの役割を経験したり、意思決定できる場面を設定したりできるようにしていく。	話し合いの仕方や合意形成を図って意思決定を行う力をつけるために、学芸や国語の話し・聞く学習の時間を活用し、児童全員が話し合いでそれぞれの役割を経験したり、意思決定できる場面を設定したりできるようにしていく。
【学習指導】	子どもたちの社会参画の意識を高めるために、自発的、自目的な活動を推奨するとともに、その活動の意味やあり方を問いながら、子どもたち一人一人が実感をもって活動に取り組んでいけるようにする。	子どもたちの社会参画の意識を高めるために、自発的、自目的な活動を推奨するとともに、その活動の意味やあり方を問いながら、子どもたち一人一人が実感をもって活動に取り組んでいけるようにする。
【学習指導】	話し合いの仕方や合意形成を図って意思決定を行う力をつけるために、学芸や国語の話し・聞く学習の時間を活用し、児童全員が話し合いでそれぞれの役割を経験したり、意思決定できる場面を設定したりできるようにしていく。	話し合いの仕方や合意形成を図って意思決定を行う力をつけるために、学芸や国語の話し・聞く学習の時間を活用し、児童全員が話し合いでそれぞれの役割を経験したり、意思決定できる場面を設定したりできるようにしていく。
【学習指導】	子どもたちの社会参画の意識を高めるために、自発的、自目的な活動を推奨するとともに、その活動の意味やあり方を問いながら、子どもたち一人一人が実感をもって活動に取り組んでいけるようにする。	子どもたちの社会参画の意識を高めるために、自発的、自目的な活動を推奨するとともに、その活動の意味やあり方を問いながら、子どもたち一人一人が実感をもって活動に取り組んでいけるようにする。
【学習指導】	学校全体をよりよくしていくこととする態度を養うために、学級での話し合い活動や委員会活動などを通して、他学年の様子にも目を向けさせ、学校全体の課題として問題提起したり、課題解決を図ろうとしたりする経験をさせていく。	学校全体をよりよくしていくこととする態度を養うために、学級での話し合い活動や委員会活動などを通して、他学年の様子にも目を向けさせ、学校全体の課題として問題提起したり、課題解決を図ろうとしたりする経験をさせていく。